中食・外食の米需要と供給

―実需者が求める米と品種・産地の現状―

研究員　原　理紗

米の消費量が長期的に減少するなかで、中食・外食による米消費量は安定的に推移している。そこで、実需者が求める米の特性を整理し、品種・産地別の供給状況について分析する。

1　米の中食・外食消費は全体の3割

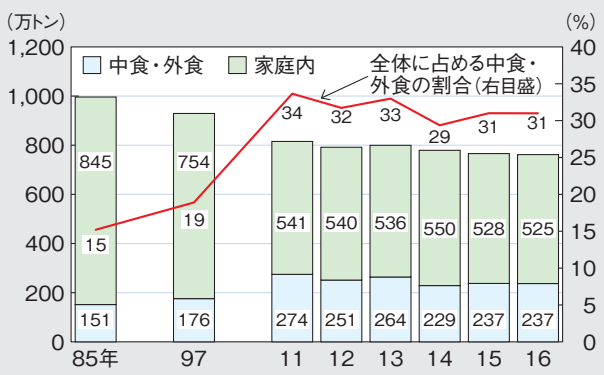
米の消費形態（第１図）をみると、家庭内での消費量は長期的に減少する一方、中食・外食での消費量は増加してきた。足元では、中食・外食の消費量は漸減しているものの、全体の３割を占め、底堅い需要がある。

2　実需者が求める米

実需者が米に求める要件を整理すると、米飯調理食品は原価率が高いため、まず重視されるのが価格である。農林水産省の調査（2016年産）によれば、業務用向けに販売された米の７割は60 kgあたり 13～14千円（相対価格）で平均の14.3千円よりわずかに低い。

また、大手コンビニ向けに米飯食品を製造するメーカーによると、商品によって求める米は異なる（第１表）。例えば、おにぎりは、冷飯でもおいしく、甘みがある米が求められる。

第1図　米の消費形態別消費量



資料　農林水産省「食料需給表」および米穀安定供給確保支援機構「米の消費動向調査結果」より算出
（注）　ただし、10年以前は85、97年のみデータが公表されている。

第1表　コンビニの米飯食品向けに求められる米

	提供方法	商品に求められる食味	加工工程へのなじみやすさ
おにぎり	冷飯	甘み、粘りがある 粒が立っている ほぐれやすい	機械にくっつきにくい 成形しやすい
常温弁当	冷飯または温飯	粘りがある やわらかい	急速冷却に耐えられる(注) 成形しやすい
チルド弁当	温飯	あっさりしている 具材との相性がよい	長時間の過熱に耐えられる(注) 経時劣化がなだらか

資料　日本べんとう振興協会からの聞き取りより作成
（注）　耐えられるとは、食味や栄養価が低下せず、形も維持することを指す。

一方、チルド弁当には温めたときにおいしく、あっさりした味の米が適している。加工の容易さも重要で、おにぎりの場合、成形機械の清掃がしやすい、粘着しにくい米が求められる。

このように、実需者は、値ごろ感があり、商品に適した米を、品種や産地を勘案しながら調達している。

3　業務用向けに販売される品種

実際の供給状況を把握するため、農林水産省のデータをもとに、品種別の「業務用向け販売量」と「業務用割合（全体の販売量に占める業務用向けの割合）」を推計した。(注1)

その結果によると、業務用向け販売量は、上位24品種が全体の83％を占めている。それら24品種の業務用割合と平均価格(注2)をみたものが第２図である。

業務用割合が高い品種は、価格帯が低い、アケボノと日本晴である。アケボノは、大粒で粘りが少なく炊飯歩留まりが高いことが外食や炊飯業者のニーズと合致しており、主産地である岡山県では、販売先を業務用向けに特化している。業務用向け販売量全体に占めるアケボノと日本晴の割合は２％と少ない。

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

したがって業務用向けに販売されている米は、家庭向けにも供給される品種が大部分を占めていることが分かる。

業務用向け販売量が多いのは、コシヒカリ、ひとめぼれ、ヒノヒカリをはじめ、家庭内でも消費されるなじみ深い品種である。

一方、価格帯が高く、業務用割合が低い品種として、ゆめぴりかとつや姫がある。これらは、業務用向けとしては地産地消が推奨される給食用を中心に供されているとみられる。

4　産地は東日本に集中

また、必要量確保という点から、道府県別に業務用向け販売量（推計値）をみると、西日本は少なく、東北、北関東、北海道で多い（第３図）。

東北や北関東は米の産地が多く、ロット確保がしやすい。また、首都圏へ向けて輸送する物流コストが低い等の利点があることから、販売量が多いものとみられる。

全国展開する大手コンビニは、西日本地域の炊飯工場で、近隣産地の不足分を東北から輸送して使用するケースもある。

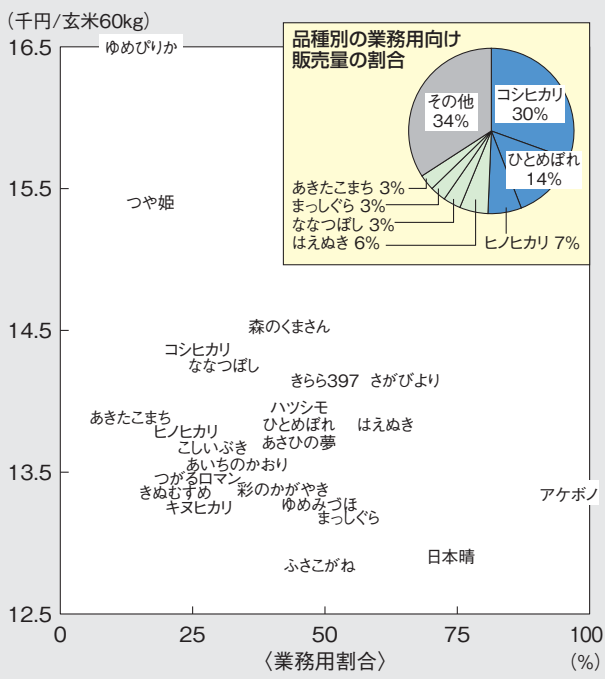
5　業務用向けに適した米の増産へ

以上をふまえると、業務用向けの低価格帯の品種は生産量が少なく、調達は難しいとみられる。したがって、実需者は家庭向けに供給される品種のなかから生産量、品質、価格のバランスを見極めながら調達している状況にある。

実需者のなかには他社との差別化を図るため、良食味と多収を兼ね備えた新品種に注目し、産地との契約栽培によって導入する動きもある。こうした取組みがどのように進展するのか、今後の動向に注目したい。

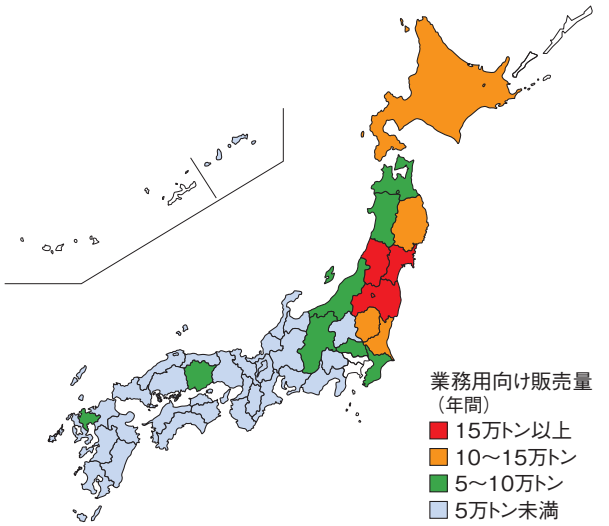
（はら　りさ）

第2図　品種別の平均価格と業務用割合



資料　各種資料より作成
（注）　アケボノは、業務用割合の推計値が100%を超えたため、100%として記載。

第3図　道府県別の米の業務用向け販売量



資料　各種資料より作成
（注）　色のついていない県（東京、神奈川、沖縄）は、業務用販売量が低く、データなし。

（注１）業務用割合は、業務用向け販売量から生産量を除して算出。業務用向け販売量は、農林水産省「米に関するマンスリーレポート」平成30年３月号の「業務用向け割合」、「平成28年水陸稲の収穫量」の「主食用米収穫量」、「米の消費動向調査」の「農家直売と縁故米の購入・入手割合」をもとに、道府県別・品種別に算出した概算値。生産量は、米穀安定供給確保支援機構「平成28年産水稲の品種別作付動向について」の品種別「作付面積割合」から算出した概算値である。ただし、品種ごとの反収の違い、飼料用への仕向け量の影響は考慮されていない。

（注２）平均価格は、農林水産省「平成28年産米の相対取引価格・数量」の「産地品種銘柄別価格」をもとに、業務用向け販売量割合による重みづけをして算出。